

# 『入菩提行論細疏』第九章をめぐる

九州大学 釈 見弘

## 一 はじめに

『入菩提行論細疏』 *Bodhicaryāvatāra -pañjikā* は、十章からなる『入菩提行論』 *Bodhicaryāvatāra*<sup>1</sup> に対する注釈書である。『入菩提行論』の原名 *Bodhicaryāvatāra*<sup>2</sup> は、「悟り (bodhi 菩提) のための実践 (caryā 行) へ入ること (avatāra 入)」を意味しており<sup>3</sup>、この書は仏の完全な悟りを得ようとした菩薩の誓願、およびその誓願を果たすための菩提行つまり「六つの完成」(六波羅蜜) を語るものである。

秀麗な韻文で構成された『入菩提行論』は、八世紀前半<sup>4</sup> にインド Nālandā 寺院で活躍した僧侶、Śāntideva (寂天) の主著である。彼はこの書の中で、中観学派の空思想の真理を論究し、また布施・

<sup>1</sup> 本書には二種の伝承本が現存する。すなわち、全十章からなり、約 900 詩頌を含むサンスクリット本 (そのチベット訳本が現行のチベット大蔵経の中に収められている) と、全九章からなり、約 700 詩頌を含むチベット訳本として敦煌出土文献の中にも残っているものとである。九章立ての敦煌本の方が原作に近いことは、1980 年代以降、斎藤明教授を始めとする諸学者によって明らかにされつつある。Cf. Akira Saito, "Śāntideva in the History of Mādhyamika Philosophy", in *Buddhism in India and Abroad*, ed. K. Sankararayan, M. Yoritomi and S. A. Joshi (Mumbai: Somaiya Publications Pvt., 1996), p. 258.

<sup>2</sup> 『入菩提行論』 *Bodhicaryāvatāra* という題名の他、『入菩薩行論』 *Bodhisattvacaryāvatāra* という題名もある。斎藤明、「敦煌出土 アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」、『チベット仏教と社会』(春秋社、1986) pp. 108n43 を参照のこと。

<sup>3</sup> この語義解釈は Prajñākaramati の注釈に従ったもの。Cf. Louis de La Vallée Poussin, *Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, Bibliotheca Indica (Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1901), p. 421, ll. 3-4, p. 385, ll. 19-20. (以下、Louis de La Vallée Poussin の校訂本を BCAP と称する。) また、Crosby 氏と Skilton 氏は "Undertaking the Way to Awakening" と訳している。Cf. Kate Crosby and Andrew Skilton, *The Bodhicaryāvatāra / Śāntideva* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p. xxx (introduction).

<sup>4</sup> Śāntideva の年代については諸説がある。塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著、『梵語仏典の研究 III・論書篇』(平楽寺書店、1990) p.250n1 を参照されたい。

持戒等々の菩薩の徳目が日々の生活においてどのように実践されるべきかについても具体的に示している。おそらくそのためであろう、インドにおいても、チベットにおいても、この書が広く愛読され、数多くの注釈書、解説書ないし抜粋集が撰述された<sup>5</sup>。それらのうち、サンスクリットで現存する唯一の文献が、11世紀前後に活躍したインド人、Prajñākaramati が著した『入菩提行論細疏』（以下『細疏』と称する）である。

11世紀後半からインドやチベットにおいて重要視されきたこの注釈書の中、思想的に最も重要な位置を占めているのは、第九章「知恵の完成」（般若波羅蜜）章である。この第九章は、20世紀の始め頃から学界においてすでに注目されてき、1994年にオーストラリア国立大学の Peter. R. Oldmeadow によって初めて完全に英訳された<sup>6</sup>。しかしその全訳には残念ながら、シノプシスが付されていない<sup>7</sup>。そこで本稿では、第九章全体のシノプシスを作成しその内容の全体を提示することとする。シノプシスを示す前に、Oldmeadow 博士があまり論じていなかった Prajñākaramati の生涯、年代、思想的立場などについてここでまとめておこう<sup>8</sup>。

## 二 Prajñākaramati の生涯、年代と思想的立場

### 1 生涯

Prajñākaramati の生涯に関しては、われわれは *Bule Annals* および Tāranāta の仏教史からわずかな資料を得るだけである。両者の記述によれば、彼は Vikramaśīla 寺院の「六賢門」（六つの門を守護する六人の学者たち）の一人として活躍したと伝えられている。

*Bule Annals* においては、「六賢門」の名前を次のように挙げる。東門にあるのは、Śānti pa であり、南門にあるのは、Ngag gi dbang phyug grags pa (Vagīśvarakīrti) であり、西門にあるのは Shes rab 'byung gnas blo gros (Prajñākaramati) であり、北門にあるのは Nā ro paṅ chen (Nāro pa) であり、中央にあるの

<sup>5</sup> この作品は漢訳されはしたが、訳文が晦澁難解などの理由により、中国仏教への影響はあまりなかった。斎藤明、「『入菩薩行論』の謎と諸問題——現行本第9「知恵の完成（般若波蜜）」章を中心として——」、『東方學』87(1994)、p. 147、釋如石、『入菩薩行 導論譯注』、修訂版（台北：藏海出版社、1994；初版、1991）序文 pp. II-III を参照されたい。

<sup>6</sup> Peter. R. Oldmeadow, "A Study of the Wisdom Chapter (Prajñāpāramitā Pariccheda) of the Bodhicaryāvatāraṅgikā of Prajñākaramati", Diss. Australian National University, 1994.

<sup>7</sup> 一部のシノプシス (BCAP pp. 342-410) は作成されたが、その分量は全体の四分の一にすぎない。

<sup>8</sup> 本稿の内容は筆者の博士論文、「『入菩提行論細疏』第九章の研究と和訳」（『細疏』第九章の日本語全訳を含む、2000年12月、九州大学へ提出）からのものである。

